

## 医学との交錯

### —松下道信氏『宋金元道教内丹思想研究』を読む—

劉 青

#### はじめに

松下道信氏の著書『宋金元道教内丹思想研究』は中国近世における道教の内丹思想を検討したものである。従来の研究では、全真教の「新道教」としての特質を過度に強調し、「旧道教」との断絶を指摘する余り、両者の関係を重要視しなかつたとの問題点がある。本書は全真教を正確に位置づけることを目的とし、北宋から元までの全真教及び全真教と内丹道の関係を再検証している。文献研究を主な研究方法とし、膨大な文献量を分析し、実証的に検証した。その検証は論理的かつ厳密であり、各根拠を十分に裏付けている。

本稿は筆者の研究分野と関心領域から思考をはじめ、日本中国学会第七五回大会書評シンポジウムパネルⅠの議論や現場での質問に基づいて、論を展開する。

#### 一、出版活動と師授意識

松下氏の著書では、白玉蟾に関連する膨大な記録や文集から、その思想様相と展開が整理され、さらに、宋金元明の出版状況及び刊行地である福建が取り上げられた。時代背景の下で白玉蟾の出版過程や出版意図といった方向から白玉蟾の思想にアプローチしており、その新規性が魅力である。本書の第二篇第二章「白玉蟾とその出版活動—全真教南宗における師授意識の克服」では、従来の文化出版史の研究は儒教經典を中心に行われてきたが、本書では道教側の出版文化に焦点を当てたと、松下氏は述べている。まず、白玉蟾に関する記述に基づき、白玉蟾は自覚的、意識的に出版を利用したとの結論に至った。松下氏は、白玉蟾の生前に弟子たちは彼の著作の刊行に関与し、死後も出版活動を積極的に行っていたと指摘した。白玉蟾と比して、張伯端や石泰、薛道光、陳楠が残した著作は少なかったが、その理由として、白玉蟾及びその内部の出版意識が変革したためであると指摘している。具体的には、白玉蟾が内丹道における伝授にまつわる意識を変革し得たことにより、初めて出版が利用できるようになったと、松下氏は指摘した。

北宋以来、木版印刷の技術が次第に成熟したことによって、書

物の刊行は隆盛を迎え、知識の普及に重要な役割を果たした。とくに福建は竹と紙の産地であるため、刊行業が発達していたとされている。福建は経済、文化が発展し、知識人たちの書籍に対する需要が増大したことも、出版業隆盛の重要な要因だと言われている。白玉蟾及び後人たちが積極的に出版を利用し始めた理由は、内部変革のほか、印刷の状況を含めた社会環境や時代背景についても、検討する余地があると思われる。

医学思想において、金元の四大家と呼ばれた劉完宗、張子和、李東垣、朱丹溪が登場したことで、新しい医学理論が形成され、南宋から元に至るまで、医学は大きな変革期を迎えることとなる。そもそも漢代から中国の人口は南下する傾向があり、北宋以後、異民族に追われたことで南部に撤退し、元代にはピークに達した。環境変化の中で、風土病や伝染病が流行したことで、一層、医学理論や治療法に対応しきれない状況が続いていたとされている。従来の『素問』『傷寒論』によって作られた医療体系を反省・批判し、劉完宗、張子和、李東垣、朱丹溪を含め、民間の医家たちは積極的に出版を利用して、新たな医説を語った。社会情勢と関連して考えると、激動の時代において、人々は生、死、病について異なる理解を持ち、それゆえにより多くの努力をしただろうと思われる。

また、本書の第一篇第二章で、松下氏が『悟真篇』や各注釈本がどのように著され流通したかに注目した部分は、新たな方向性を示唆している。版本自身の問題に過度にとらわれず、その背景に注目する姿勢は当該領域の研究に新たな視点をもたらしている。張伯端の伝授意識については、「三伝非人、三遭禍患」という記述から、人を明確に選択せずに口訣を伝授することで天譴を招く危険がある

というものであったと考えられる。張伯端は「不許輕伝於非人」と理解したため、予言通りに第二祖の石泰と出会った。松下氏はまた張伯端は内丹修煉には口訣が不可欠と考えていると指摘している。また、『悟真篇』に関する問題に対し、もし出版物を読んで自ら理解できる人がいれば、それは仙骨を有する人であり、「天賜」を授かっていると張伯端が考えているという。

『悟真篇』の注釈について、一一六一年に葉士表は自身の理解に基づき、最初の注釈を作成した。その後、翁葆光は原書の正しい意義を広められないことを心配し、天譴を恐れず注釈を書いた。翁葆光、薛道光の注釈は平易な言葉で『悟真篇』の詩文を解釈したものだが、松下氏は丹訣を解釈するための口訣や師伝に相当すると判断し、注釈を施すことは口訣を脅かす側面を持つていたとの結論に至った。「天機を泄す（泄天機）」という問題をめぐって、口訣と注釈の関係を明確に考察している。

最後に白玉蟾の師授意識に関して、『修真十書雜著指玄篇』の白玉蟾と陳楠の対談が載せられている。そこからは、口訣を刊行することは、「師は天涯に在り、弟子は海角に在り」、わざわざ弟子を探すことは甚だしく困難であるため、口訣を刊行し天下に広げ、仙分と才能を有する人が自然に集まってくる、つまり、それが天賜であるという考えが明らかになった。松下氏は白玉蟾の刊行に対し、その理由を「白玉蟾はどんな人にも仙分があると考えていた」、「あらゆる人々を救うためとされている」と指摘した。しかし、その指摘はやはり白玉蟾の言葉「師は天涯に在り、弟子は海角に在り」と矛盾していると見られる。

仙分に対する考えは昔から存在した。『抱朴子』では人は氣を受

けて出生し、生星に属する人は、必ず仙分を好み、求めれば仙人になることができる。それに対して、死星に属する人は仙道を信じず、仙道を修めることもない。白玉蟾の時代になると、その考えがどのぐらい変化したかはまだ疑問が残る。南宋中葉、知識が一般の人々まで開かれる傾向があると言っても過言ではない。医学書の場合でも、とりわけ元明では、医学書の出版ブームを迎え、医家や知識人たちは分かりやすい言葉で医学知識や養生知識を一般の人々に伝えて、医学知識の普及に努めたことが知られている。しかし、白玉蟾が「あらゆる人々を救うため」と考えていたことに対し、さらなる裏付けが必要である。

本篇の最後では、白玉蟾の師授意識を克服する努力を明らかにし、意識的に知識の伝播手段を利用したことによって、その後の出版への道を切り拓いたと述べられている。岡西為人の研究では金元における医学や本草のこのような著しい変換の最も直接的な原因は北宋で行われた医書の校刊にあると考えられたとされている。岡西は従来一般の医家が入手不可能であった多くの基本的医書が国家的規模の下に校勘刊行されており、誰でも容易に入手できるようになったことは、医家たちの意欲を喚起し、その結果として医学の理論と実際の治療とを関連づけて医学を体系化しようとする思想が生まれたと指摘した。<sup>(三)</sup> 医学と同じく、白玉蟾の積極的な出版行為は知識の秘密性を破り、道教の近世的発展にも影響を与えていると思われる。また、道教に内在化された開放性と神秘性に対する洞察を深める可能性がある。

## 二、修仙と頓悟

『修真十書雜著指玄篇』巻四の「修仙辨惑論」冒頭部分において、白玉蟾は修仙の方法について、陳楠に質問した。陳楠は「修仙有三等、鍊丹有三成」と答えた。仙人として、天仙、水仙、地仙があり、それぞれに対応する修練法がある。また、陳楠は修仙の最終的な証驗として、「長生不死之道」に到達すると説明した。

「長生不死之道」は古代の神仙思想を連想させる。古代の人々は長寿のため、さらには、不老不死の仙人となるため、様々な努力を積み重ねてきた。道教は成立の当初から、不老不死を追求する宗教であった。馬王堆からは、「導引図」や『十問』『合陰陽方』『雜禁方』『天下至道談』といった房中・養生の書物が出土している。『列仙伝』では仙人のエピソードが登場し、偃佺は二三百歳、彭祖は八百余歳、安期先生は千歳、崔文子は三百歳と書かれている。また、『抱朴子』は金丹術を修練することで、不老長生になれると主張している。さらに劉元丹法で作った金丹を飲めば百歳まで生きられ、石先生丹法で五百歳、康風子丹を一合飲めば百歳、一升飲めば千歳、さらに、両儀子餌黄金法なら千二百歳、二千歳まで生きられるとされた。また、五禽戯を練習すれば、百余歳まで生きられる。行気すれば、数百歳に寿命を延ばすことが可能とされた。実際に、張蒼は偶然小術を得て婦人の母乳を飲んでいたら、百八十歳まで生きたと伝えられている。

近世に入ると、元代の『三元參贊延壽書』では、人の寿命は天元六十歳、地元六十歳、人元六十歳、合わせて百八十歳、つまり、

人々は養生を行えば、百八十歳まで生きられると主張された。さらに、『三元参贊延寿書』の末尾では「寿命は私自身が決めるものであり、天によって決められるものではない。寿夭は(天)命ではなく、修業によって変えられるものである」と論じている。つまり、一般人も養生をすれば、仙人になる可能性があると思われていた。

「寿命は私自身が決めるものであり、天によって決められるものではない(我命在我不在天)」という言葉は『抱朴子』黄白篇に由来した文であり、金丹術で天命から脱出し、不老不死になることを指している。一方、本書に記された通り、『悟真篇』でもこの言葉がみられた。また、『修真十書雜著指玄篇』巻四での白玉蟾と陳楠の問答にも、この言葉が登場した。いわば、白玉蟾は口訣を刊行しようとしているが、天譴を恐れていると語ったことに対して、陳楠は「我が命は我在に在り、天に在らず」と答えた。以上の内容から、元代まで不老不死という理想及び最終的な目標は変わらなかったといえる。

一方、陳仲奇氏に指摘された通り、早期の神仙説と養生思想はそもそも別の理論である。神仙は生死の限界を超え、天と地の間を自由に往復できる存在である。養生は常人が肉体そのものの長生の可能性を高めるため、肉体を守るための様々な努力である。陳氏が指摘した観点に加えて、近世の内丹思想の視点から、不老不死がどのように理解され、実現されたかについては依然として問題が残されている。

横手裕氏は王嘉の金丹の捉え方を分析している。王嘉は、「金丹」を「本来の真性」であるとし、金丹の錬成は自分の心の修練であるとした。本来の真性を練り上げることで、邪念妄想を排除して心に

何物も無くなれば、それによって自然とすぐに仙人になれるとされている。そして、「金丹」は悟り、もしくは本来的に悟りを具えた心性であると横手裕氏は指摘した。

本書によれば、「陽神を強調することは内丹の命の側面を強調することに成る」という理解から始まり、「陽神の行方は、仙界へと連なるものとしてかんがえられているのであり、陽神の背後には神々の世界が広がっているといってもよい」(一〇八頁)と捉えている。つまり、仙人へ繋がる道は陽神の錬成であると説明されている。さらに、白玉蟾の時代になると、不老長生の実現の手順として、陽神を錬成することだけでは不十分であり、形神俱妙となるために、頓悟することが要求されるようになった。ここでは、頓悟の対象は「本源新覚の性」とみなした。松下氏は南宗が禅との違いとして金丹の錬成、或いは陽神の完成を目指し、また内丹道の内部で頓悟の必要性を説いたと指摘した。つまり、ここでの頓悟と禅宗における頓悟とは異なることを認識している。したがって、南宗自身のアイデンティティも確立するに至ったという新しい視点を提供している。

### おわりに

今回のシンポジウムは二時間に亘って、議論と意見交換を実施した。シンポジウムについて感想を述べれば、最後の題目である奥野新太郎氏が提起した「宋金元という時代」に対する議論が残されたのが非常に残念である。新道教の問題は、宋金元のこの特別な時期と密接に関係しているに違いなく、今後の研究において、それぞ

れの視点からこの時代はより豊かに定義されるだろう。

《注》

- (一) 黄永年『古籍版本学』、江蘇教育出版社、二〇〇五年、八一頁。
- (二) 宮下三郎「宋元の医療」、藪内清『宋元時代の科学技術史』、京都大学人文科学研究所、一九六七年、一二三―一七〇頁。
- (三) 岡西為人「中国本草の伝統と金元の本草」、藪内清『宋元時代の科学技術史』、京都大学人文科学研究所、一九六七年、一七一―二二一頁。
- (四) 陳仲奇「道教神仙説の成立について」、『総合政策論叢』第一号、島根県立大学総合政策学会、二〇〇一年三月、一四九―一七〇頁。
- (五) 横手裕『道教の歴史（宗教の世界史 6）』、山川出版社、二〇一五年、一八三頁。

